

矢島仁吉君の生前を偲ぶ

日本地理学会名誉会員・独協大学名誉教授矢島仁吉君は1992年5月21日、心筋硬塞で急逝された。享年84歳であった。その2日後の5月23日の同窓会に出席する旨の通知をもらっていたので、級友全員が余りの急に驚いた次第で、追慕の念を禁じ得ない。

君は1907年に東京府豊多摩郡井荻村（現杉並区）に生まれ、東京文理科大学地学科地理学専攻を卒業されたのち、同年府立第8高等女学校（現都立八潮高校）、同第5中学校（現都立小石川高校）を経て母校豊島師範学校、のちに東京第二師範学校（現東京学芸大学に統合）で地理科を担当し、武蔵野の集落地理学の研究を続けられた。東京大空襲に遭ったのち、研究対象を群馬県の火山麓や谷口集落に移したのは群馬師範学校、のちの群馬大学学芸学部に移ったからで、その後1955年には選ばれて学芸学部長になった。その間、東京文理科大学へ内地留学し、青野寿郎先生のもとで「武蔵野台地における新田集落立地に関する地理学的研究」なる学位論文をまとめて、1953年に理学博士の学位を授与された。

このち1957年、文部省中学教科書調査官に任じられた。終戦後、公民・歴史・地理3教科の教科書を新たに編纂することとなり、在京の東京高等師範学校、同女子高等師範学校、および東京の師範学校3校の3教科の代表教官各1名づつが集められて教科書の検定、指導要項の改訂などを審議した。君はそのあとを受けて主任教科書調査官、さらに中等教育局視学官を歴任して重要な中等教育行政を担当し、地理教育の発展につくされた功績は大きい。

1968年に定年退官のち、独協大学教授に就任、1971年より3年間、同大学教養部長となって、地理学の講義を担当するとともに教職課程の指導や、また大学の運営、さらに独協埼玉高等学校長としてその経営に当たられた。1981年、独協大学名誉教授となり、1988年に高等学校長、大学の非常勤講師の職を去られるまで、絶えず研究や教育につくされ、他方学会での活躍も1948年から71年まで12期にわたって日本地理学会評議員として貢献されて1980年に名誉会員に推薦された。歴史地理学会においても会計監査として協力をいただいた。1978年の叙勲では勲三等瑞宝章を受けられた。



君は文理科大学に入学すると、陸水学の立場から武蔵野台地の井戸を実測してまわり、その地下水位や水深から地下の造層層の存在を発見されたことは当時耳新しいことであった。これをもとに武蔵野台地・秋留盆地の集落を歴史地理学の立場から解明されたのが上述の学位論文となったもので、1954年『武蔵野の集落』（古今書院）として刊行された。また武蔵野につづいて群馬県について早くから多くの論文を発表し、『群馬県新誌』（日本書院、1951年）においてそれらの成果が示されている。

これについては都市地理学を視野に入れた集落地理学の位置づけにつとめ、その成果として『集落地理学』（古今書院、1956年）、『集落調査法』（古今書院、1958年）、『日本の集落』（古今書院、1958年）が刊行された。さらに入門書として『地理学論文のまとめ方と書き方』（古今書院、1962年）がある。木内信蔵・藤岡謙二郎・矢島仁吉共編『集落地理学講座』（全4巻、朝倉書店、1957～59年）、矢島仁吉・位野木寿一・山鹿誠次共編『現代地理教育講座』（全5巻、古今書院、1972～79年）はこれらを集大成したものと見える。

君は多忙の中で太陽の昇らない早朝から読書・執筆し、その精神力に敬服すると同時に、恩師に対する尊敬もかわらず、指導を受けた田中啓爾先生・峯岸米造先生の墓参は終始変わらず続けられたという。

遅ればせながら同君のご冥福を祈る次第である。

（松村 安一）

（写真は1990年6月、石井 實撮影）